「人と建築物と海」の関係からみた海景観賞の型に関する研究

—「江戸名所図会」を事例として—

RESEARCH ON TYPES OF SEASCAPE APPRECIATION SEEN BASED ON
RELATIONS OF “MAN, BUILDINGS, AND THE SEA”

—Using “Edo-Meisho-Zue” as examples—

島 妃沙子*, 横内 憲久**, 岡田 智秀***, 猪股 弘樹****

Hisako SHIMA, Norihisa YOKOUCHI, Tomohide OKADA
and Hiroki INOMATA

The purpose of this research is to grasp type marine scenery (type of KAIKEI-KANSHO), created through the unification of three elements: “man,” “building structure,” and the “sea.” Regarding the method of research, we took up the Edo Era and analyzed “EDO-MEISHO-ZUE,” in which the urban space at the time was faithfully depicted. As a result, we found 6 maritime scenery appreciation types, including the “type of creating a sense of openness,” the “type of guiding the gaze,” and the “type of stimulating appreciation.”

Keywords : Edo-Meisho-Zue, Type, Seascape, Waterfront

江戸名所図会、型、海景、ウォーターフロント

1. 研究目的

ウォーターフロント開発の魅力のひとつは、都市にいながらしで、広大な海や海上を行き交う船舶など、ウォーターフロントならではの景観（以降ではこのような景観を海景とする）が一望できるところにある。こうした海景を観賞する方法（型）は、整備の仕方によってさまざま生み出されていくと考えられる。中でも建築物は、ウォーターフロントの景観の印象を大きく左右するため、その操作性を活かすことで、海景の観賞方法を多彩にしていける可能性を秘めている。すなわち、図-1 に示すように、海と人との間に建築物が介在した場合、その建築物の立地場所や形態などによっては、海景の一構成要素（図中①）になることもあれば、海景へと意識を向けさせる（観賞行為を促す）あるいは良好な海景が享受できる視点場（図中②）にもなるなど、海景の魅力を高めるさまざまな景観的役割が期待できよう。

そこで本研究では、人と眺められる海との間に介在する建築物を、海景の魅力を高める装置として位置づけ、後述する事由により「江戸名所図会」を用いて「人と建築物と海」の3要素の関係から創出される「海景観賞の型」を明らかにすることを目的とする。これによって、現在画一的であると批判される¹⁾²⁾ わが国のウォーターフロント開発における今後の景観デザインのあり方に、示唆を与える

図-1 建築物の景観的役割

ことができると考える。

2. 既往研究における本研究の位置づけ

わが国の近世における水辺の建築物のあり方について論及した既往の研究には、例えば須藤ら³⁾による水辺の建築物の形態的特徴や立地場所を整理したもの、上島ら²⁾による水辺の建築物がアクセス路または視点場として果たす役割を明らかにしたものなどがある。しかし、本研究が意図するような、人（視点）と建築物（視点場あるいは視対象）と海（視対象）の3要素の関わりから海辺における建築物の景観的役割（型の特徴）を捉え、どのように海景の魅力を高めているのかについて明らかにしたものはみられない。

* 日本大学大学院海洋建築工学専攻 大学院生

** 日本大学理工学部海洋建築工学科 教授・工博

*** 日本大学理工学部海洋建築工学科 助手・工博

**** 日本大学大学院不動産科学専攻 大学院生

Graduate Student, Dept. of Oceanic Architecture & Engineering, College of Science & Technology, Graduate School of Nihon University
Prof., Dept. of Oceanic Architecture & Engineering, College of Science & Technology, Nihon University, Dr. Eng.
Research Assoc., Dept. of Oceanic Architecture & Engineering, College of Science & Technology, Nihon University, Dr. Eng.
Graduate Student, Dept. of Real Estate Science, College of Science & Technology, Graduate School of Nihon University

3. 研究方法

(1) 分析資料の選定

本研究において「海景観賞の型」を把握するにあたっては、わが国固有の海景観賞に基づき、長年にわたり多くの人々に評価を受け続けてきた資料を用いることが肝要であると考え、欧米文化が移入される以前および地形が多様な状況を保っていることなどを踏まえ、分析資料としては、わが国の魅力的空間ともいべき名所が描写された「江戸名所図会、全七巻・二十冊」⁴⁾⁵⁾を対象とした。この「江戸名所図会」は、都市の空間構成や利用形態などを分析・把握した多くの研究⁶⁾に使われ、史料価値が認められているものであり、また、「名所」ゆえにそれを成り立たせている「人と建築物と海」の関わりが明確に捉えられるものと認識する。

(2) 分析資料の概要

本研究で分析資料とする「江戸名所図会」は、江戸時代末期(1834年、1836年)に刊行され、当時の観光ガイドブック的利用がされていたことから、人々から愛でられていた魅力的な空間が把握できるものである。また、人物や風景が丁寧に描かれており、他の名所図会と比べても写実性が高く⁶⁾、さらに、紹介されている名所の解説や絵図(事例)の題名なども示されており、各名所の見所や注目すべき特定の事物が捉えられる。

(3) 分析対象絵図の抽出方法

分析資料において「人」「建築物」「海景」という3要素が関係す

る空間構成を捉えるにあたっては、まず3要素が一つの絵図に同時に描かれているものを抽出する。ただし、絵図に「人」「建築物」「海景」が描かれていても、絵図中の3要素それぞれが小さ過ぎて茫漠とした風景であったり、また一部の要素が背景的に描かれているなど、3要素間の積極的な関わりが見出せないと判断したものについては抽出対象外(30事例)とする。

分析対象とする3要素の特定は、「江戸名所図会」に記載されている各名所(事例)の解説文や絵図の題名に着目し、その内容と絵図を照らし合わせて判断する。つまり、各名所の解説文から景物となる「海景」を抜き出し、それと関連の深い「人」と「建築物」を絵図から特定する。例えば図-2の「神奈川臺」には、解説に「この地は、いづれも海岸に臨みて海亭をもうけ、往来の人の足を止む。」「あま小舟軒端によするこちしてながめえならぬかの川の里」とある。そこで、「えもいわれぬほど」美しいとされる「海景」への眺めを支援するように、海に面して建てられた「建築物」(海亭)、そしてその建築物から遠眼鏡を使って遠くの海景を見ようとする「人」がこの絵図の3要素となる。

以上の方法に基づいて得られた3要素の関わりが密接な対象絵図は、「江戸名所図会」に掲載された全絵図(649事例)のうちの21事例となり、この中から1枚の絵図であっても複数の視点場・建築物・海景が特定できる場合もあり、合計31景が抽出できた。このことは同時に、各絵図において「人」「建築物」「海景」の関連性が特定できたことを意味する。

表-1 「人」「建築物」「海景」の特定とその位置となる目盛

No	絵図名	人		建築物		海景	
		人の位置(視点場)	目盛	建築物の立地場所	目盛	海景の位置 (主題または視対象)	目盛
1	御殿山 看花	まちなかの小高い丘・山	X ₅	まちなかの小高い丘・山	Y ₅	水平線(月の出)	Z ₆
2	八景坂 鐘掛松	まちなかの小高い丘・山	X ₅	まちなかの小高い丘・山	Y ₅	沖(海を望む)	Z ₅
3	神奈川臺	海岸から切り立つ高台	X ₄	海岸から切り立つ高台	Y ₄	沖(海を眺める)	Z ₅
4	金龍院 飛石	海岸から切り立つ高台	X ₄	海岸から切り立つ高台	Y ₄	沖(海を眺望する)	Z ₅
5	清澄寺	小高い丘・山	X ₅	小高い丘・山	Y ₅	水平線(日の出)	Z ₆
6	寒橋	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖(船の航行)	Z ₄
7	佃島 住吉明神社	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖(船の航行)	Z ₄
8	町屋村 龍華寺	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖(船の航行)	Z ₄
9	寄木明神社	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	沖(船の航行)	Z ₄
10	洲崎弁天	海に突き出した道	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	沖(船の航行)	Z ₄
11	瀬戸辨財天	海に突き出した道	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	沖(大海)	Z ₄
12	潮見坂	まち並みを見渡せる丘陵	X ₆	まち並みを見渡せる丘陵	Y ₆	沖(潮見)	Z ₆
13	洲崎辨財天社(I)	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際(海岸の真砂)	Z ₁
14	洲崎辨財天社(II)	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際(海岸の真砂)	Z ₁
15	洲崎辨財天社(III)	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上(千鳥)	Z ₂
16	洲崎辨財天社(IV)	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上(千鳥)	Z ₂
17	瀬戸橋(I)	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上(水鳥)	Z ₂
18	瀬戸橋(II)	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上(水鳥)	Z ₂
19	瀬戸橋(III)	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖(遠い山の奥の眺め)	Z ₅
20	瀬戸橋(IV)	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖(遠い山の奥の眺め)	Z ₅
21	瀬戸明神社(I)	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際(打ち寄せる波)	Z ₁
22	瀬戸明神社(II)	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	波打ち際(打ち寄せる波)	Z ₁
23	瀬戸明神社(III)	海岸線沿い	X ₁	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖(出島の緑)	Z ₃
24	瀬戸明神社(IV)	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	沖(出島の緑)	Z ₃
25	行徳衛	海岸線から後退した建築物の内部	X ₂	海岸線から後退した陸域	Y ₂	岸寄りの海上(千鳥)	Z ₂
26	高輪海邊 七月二十六夜待	海道の陸側にある建築物の内部	X ₃	海道	Y ₃	水平線(月の出)	Z ₆
27	高輪大木戸	海岸線沿い	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	波打ち際(渚の真砂)	Z ₁
28	品川驛	海岸線沿いの建築物の内部	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	波打ち際(夕なぎ)	Z ₁
29	羽田辨財天社	海岸線沿いの建築物の内部	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	海岸線(青松や苔)	Z ₀
30	瀬戸明神社(V)	海岸線沿いの建築物の内部	X ₁	海岸線沿い	Y ₁	波打ち際(打ち寄せる波)	Z ₁
31	洲崎明神	海道	X ₂	海岸線沿い	Y ₁	海岸線(海道)	Z ₀

(4) 抽出された対象絵図から型を得る方法

抽出された対象絵図 (31 景) の中で特定された「人」「建築物」「海景」の 3 要素は、それらの位置関係によって、海景の眺め方 (観賞方法) や海景の見え方が異なってくると考えられる。そこで、それぞれの空間構成を把握するために、抽出された全対象絵図 31 景について、「人」「建築物」「海景」の 3 要素それぞれの位置を図-3 に示す各軸上 (X、Y、Z 軸) に布置し、3 要素の交点である空間座標の集合具合と「人」「建築物」「海景」の状況を照らし合わせて類型化を行い、各類型の空間状況を考察することとした。

(5) 3 軸の意味

型を得るために用いる図-3 は、原点を海岸線として、X 軸は人の位置 (視点場)、Y 軸は建築物の立地場所、Z 軸は海景の位置 (当該絵図の主題または文中で描写された視対象などがある場) を表している。よって各軸いずれも原点から離れるほど海岸線から遠ざかる (「人」と「建築物」は内陸方向、「海景」は沖合方向へ) ということを意味する。なお、海岸線を原点としたのは、31 景の全分析対象絵図における 3 要素共通の位置が海岸線となったことから、それを基準として 3 要素の位置関係を捉えたかったためである。

(6) X 座標、Y 座標、Z 座標の求め方

分析対象とする 31 景の X、Y、Z の座標を求めるにあたっては、人の位置 (視点場)、建築物の立地場所、海景の位置 (主題がある場) それぞれにおいて、分析対象となる全絵図を海岸線から最も近い絵図から最も遠い絵図まで相対的に序列をつけ、その序列を各軸に示された海岸線からの距離の序列を意味する目盛上に布置する。この

図-2 「人」「建築物」「海景」の特定例

図-3 「人と建築物と海景」の関係を表すための 3 軸

図-4 建築物の立地場所の求め方 (Y 座標)

注) 図中の絵図は、全体の一部を拡大したものである

図-5 「人と建築物と海」の関係からみた海景観賞の型

手順によりX、Y、Zの各軸の座標を決定した後、それらの交点を求め、これを当該景の空間座標とする。

各座標の目盛は、表-1 に示すように、分析対象全絵図から特定した「人」「建築物」「海景」のある場所を把握した結果、人の位置(視点場)と建築物の立地場所は6通り、海景の位置(主題がある場)は7通りに分類できたことから、それらの位置、すなわち31景の序列を示す記号として、海岸線から近い順に $X_1 \sim X_6$ 、 $Y_1 \sim Y_6$ 、 $Z_0 \sim Z_6$ とした。このように3要素の位置を絵図から特定する具体的な方法については、建築物の立地場所であるY軸を例として、その位置に対応する事例とともに図-4に示す。

なお、本分析において海岸線を基準とした序列(遠近)を実距離ではなく等間隔の目盛で決定したのは、分析対象絵図からは実距離を正確に把握することは不可能であること、また、実距離という子細な情報でなくとも3要素の位置関係の差異による特徴(海景の見え方、海景の観賞方法)が捉えられるためである。

以上の方法によって、全分析対象絵図(31景)の分析を行った結果、図-5に示す空間座標の集合具合と表-2に整理した3要素における空間の「状況」との共通性を照らし合わせ、6つの「海景観賞の型」に類型化し、それら6つの型の特徴から「開放型」「引き締め型」「視線誘導型」「活動誘発型」「同時型」「水面一体型」と命名し

た。以降では、これら6つの型について、表-1および表-2に整理した「人」「建築物」「海景」各々の「状況」から得られる3要素の関わり方から「海景観賞の型」の意味と特徴を述べることにする。

4. 型の意味と特徴

(1)開放型

図-5よりここに類型した事例は、「海景」($Z_5 \sim Z_6$)が他の類型より最も海岸線から離れた位置にあり、具体的には表-1の絵図No.1~5の「海景の位置」に示すような、「水平線」や「沖」である。また、この型の「人」($X_4 \sim X_5$)と「建築物」($Y_4 \sim Y_5$)は表-1に「まちなかの小高い丘・山」や「海岸から切り立つ高台」と示しており、6つの類型の中で最も内陸にある「視線誘導型」に次いで海岸線から離れたところに位置するものである。この類型に属する各事例の「人」「建築物」「海景」それぞれの共通点については表-2に示すように、「建築物」の状況は、「高台の桜の名所に立地する」や「小高い山の緑豊かな森に囲まれて立地する」など、自然物が存在する高台に立地するものであり、かつ「柱と屋根で構成される」、「海側を柱のみで全面開口している」などのように、大きな開口部を有する構造になっている。「人」は「高台に立地する建築物内から海に向かって松を眺める」や「渚から切り立った高台の建築物内か

表-2 「人」「建築物」「海景」の状況と「海景観賞の型」の成立要因

型名	№	絵図名	人		建築物		海景	
			状況	型の成立要因	状況	型の成立要因	状況	型の成立要因
(1) 開放型	1	御蔵山 看花	・高台に立地する建築物内から海に向かって桜を眺める。	開放的な建築物の内部から視点場周辺の自然物と遠方の海景を眺める。	・高台の桜の名所に立地する。 ・柱と屋根で構成される。	海側に開口部がある建築物の内部にいて、開放的で広大な海を眺めることができる。	・海面が広々と見渡せる。	開放的な建築物の内部にいて、視点場付近の自然物ともに眺めることができる。
	2	八景坂 鑑掛松	・高台に立地する建築物内から海に向かって松を眺める。		・高台の松の名所に立地する。 ・柱と屋根で構成される。		・海面が広々と見渡せる。	
	3	金龍院 飛石	・飛び石がある高台の建築物内から海を眺める。		・高台に飛石がある名所に立地する。 ・柱と屋根で構成される。		・海面が広々と見渡せる。	
	4	神奈川臺	・渚から切り立った高台の建築物内から海を眺める。		・渚から切り立った高台に立地する。 ・海側を柱のみで全面開口する。		・海面が広々と見渡せる。	
	5	清澄寺	・小高い山に立地する建築物内から日の出を眺める。		・小高い山の緑豊かな森に囲まれて立地する。 ・海側を柱のみで全面開口する。		・海面が広々と見渡せる。	
(2) 引き締め型	6	寒橋	・海道を歩行する。	海道を移動しながらスリットから眺められる海景の移り変わりを楽しむ。	・海岸線沿いに軒を連ね、スリットがある。	海岸線沿いにある建築物間の隙間(スリット)からは、ヒューマンスケールに引き締められた海景が眺められる。	・帆船が航行する。	建築物の間隙(スリット)から垣間見られることで、視線が定まらない茫洋とした海景が引き締められる。
	7	佃島 住吉明神社	・海道を歩行する。		・海岸線沿いに軒を連ね、スリットがある。		・漁船や商船が航行する。	
	8	寄木明神社	・海道を歩行する。		・海岸線沿いに建つ。		・大海原を漁船が航行する。	
	9	町屋村 龍華寺	・海道を歩行する。		・海岸線沿いに建つ。		・船が航行する。	
	10	洲崎弁天	・海に突き出した海道に建つ。		・海に突き出した出島の海岸線に建つ。		・大海原漁船が航行する。	
	11	瀬戸辨財天	・海に突き出した海道に建つ。		・海に突き出した出島の海岸線に建つ。		・波風が穏やかな大海原である。	
(3) 視線誘導型	12	瀬見坂	・海に向かって伸びる街道上から海を眺める。	沿道両側の建築物に視線が誘導されて、まちなかから海景を眺められる。	・海を望める丘陵の斜面に立地している。 ・海へ向かって伸びる沿道の両側に軒を連ねる。	沿道両側の建築物が海へ向けて視線を誘導する働きをもつため、海から遠く離れた丘陵からも海景が眺められる。	・海面が広々と見渡せる。	まちなかの視点場から、建築物に視線を誘導されて眺められる。
(4) 活動誘発型	13	洲崎辨財天社 (I)	・建築物より海側のスペースで遠眼鏡を使って海景を眺める。	海景が変化することに建築物の内外を行き来しながら眺める。	・海岸線から後退して建つ。 ・地面に近い高さの座敷をもつ。 ・海側全面に縁側のある開口部をもつ。	地面に近い高さの座敷があり海側全面に開口部があることで、屋内外の行き来を促している。	・春先の砂浜で人々が潮干狩りをする。	潮の干満に伴い多様に変化することで人の興味を引き付け、様々な人間活動を引き起こす。
	14	洲崎辨財天社 (II)	・茶屋の縁台に座る。				・冬の干潮時の水辺に千鳥が活動する。	
	15	洲崎辨財天社 (III)	・建築物より海側のスペースで遠眼鏡を使って海景を眺める。				・干潮時の干潟に水鳥が降り立つ。	
	16	洲崎辨財天社 (IV)	・茶屋の縁台に座る。				・満潮時の入り江に海水が満たされる。	
	17	瀬戸橋 (I)	・建築物より海側のスペースから海景を眺める。				・松の古木が浦風になびき、波に洗われる。	
	18	瀬戸橋 (II)	・料亭の座敷から海景を眺める。				・出島の縁にある松が打ち寄せる波に洗われる。	
	19	瀬戸橋 (III)	・建築物より海側のスペースから海景を眺める。				・海上に千鳥が飛び交う。	
	20	瀬戸橋 (IV)	・料亭の座敷から海景を眺める。					
	21	瀬戸明神社 (I)	・建築物より海側のスペースから海景を眺める。					
	22	瀬戸明神社 (II)	・茶屋の縁側から海景を眺める。					
	23	瀬戸明神社 (III)	・建築物より海側のスペースから海景を眺める。					
	24	瀬戸明神社 (IV)	・茶屋の縁側から海景を眺める。					
	25	行徳衛	・縁側から海景を眺める。					
(5) 同時型	26	高輪海邊 七月二十六夜待	・海岸線から後退して建つ建築物の二階から海を眺める。	高い位置の座敷(2階)から陸と海のにぎわいと海景(水平線)を眺める。	・海岸線から後退して立地している。 ・高い位置に座敷がある。	陸・海のにぎわいの景と海景を、一体に見せる。	・月が水平線から昇る。 ・月の出を待って海辺でにぎわう人々。	水平線と、陸と海で一体となったにぎわいが同時に眺められる。
(6) 水面一体型	27	高輪大木戸	・茶屋の縁台に座る。	海岸線沿いの建築物による空間で水面との距離が物理的にも精神的にも近くなる。	・海岸線に接している。 ・海側を全面開口している。	海側全面の開口部や低い座敷をもち、海岸線沿いに建つことで、水面に極めて近い位置に視点場を置くことができる。	・砂浜が浦波に美しく洗われる。	海岸線付近の情景により水面がかもしだす雰囲気を高めている。
	28	品川驛	・料亭の開口部から海景を見る。		・海岸線に接している。 ・海側を柱と屋根のみで全面開口している。 ・水面に近い高さの座敷がある。		・海岸に夕坪がおこる。	
	29	羽田辨財天社	・茶屋の縁台に座る。		・海岸線に接している。 ・柱と屋根と座敷のみで構成される。 ・水面に近い高さの座敷がある。		・波に打たれながら松や苔が繁茂する。	
	30	瀬戸明神社 (V)	・茶屋の縁台に座る。		・海岸線に接している。 ・海側を全面開口している。 ・水面に近い高さの座敷がある。		・松の古木が浦風になびき、波に洗われる。	
	31	洲崎明神	・海岸線沿いに建つ。		・海岸線に接している。 ・スリットがある。		・雁木から荷の積み降ろしがされる。	

ら海を眺める」であり、いずれも高台にある建築物の内部に視点場（人）がある。「海景」においては、すべての事例から「海面が広々と見渡せる」という共通の状況を読みとった。

これらよりこの型は、自然物の名所である高台において、視点場となる建築物が大きな開口部をもつことで、眼前の自然物と眼下に広がる海が一体となって一望できることが最大の特徴である。例えば「2. 八景坂 鑑掛松」（図-6）では、解説に「この地より望めば、海上眼下にありて美景の地なり」とある。さらに、鑑掛松について「枝葉柳条のごとく垂れ下がりて、地を離ること、その間わづか四、五尺に過ぎず。」「一に荒磯松、磯馴松とも呼び、あるいは、震松とも号く。」と記述され、この松の様子や別名が把握できる。これらより、美しい海が俯瞰で眺められ、その海に向けて眼前の松の枝葉がまるで波に打たれるかのように枝垂れている状況が読みとれる。ここでは、観賞の場（視点場）である茶屋（建築物）が柱と屋根のみの構成で視界が開放され、視点場付近の自然物が眼下の「海景」へと視線を導くという空間構成になっている。

このように「開放型」は、視点場となる建築物が大きな開口部をもち視野を開放的にすることで、海方向へと視線を導く近景の自然物と遠景の海景がともに一望できる型である。

(2) 引き締め型

この型（図-5）は、「人」（ $X_1 \cdot X_2$ ）「建築物」（ Y_1 ）が他の類型と比べて海岸線に最も近く、「海景」（ Z_1 ）は6つの類型の中でも比較的沖寄りに位置する。それらは表-1のNo.6~11に示すように、「人の位置」は「海道」や「海に突き出した道」であり、「建築物の立地場所」は「海岸線沿い」、「海景の位置」は船が航行する「沖」である。3要素それぞれの共通点は、表-2に示すとおりである。つまり、「海景」の状況は「漁船や商船が航行すること」や「波風が穏やかな大海原である」と読みとれたことから、見通しのよい広大な海が共通していると考えられる。「建築物」は「海岸線沿いに建つ」もしくは「海に突き出た出島の海岸線に建つ」ので、いずれも海岸線に極めて近くに立地しているといえる。そして「人」は「海景」を眺めれば必ず「建築物」も視界に含まれる位置、つまり「海道を歩行する」、「海に突き出した海道にいる」というように「建築物」より内陸側に後退した位置に立つ。

これらのことからこの型は、海景が広大であるために茫洋として視線が定められにくい状況にあると考えられるが、ここではその海景を建築物が引き締めて見せる特徴があり、その引き締めの方法については2種類がみられた。一方は、広大で茫洋とした超大なスケールの海景が建築物の間隙（スリット）を介して眺められるものである。例えば「7. 佃島 住吉明神社」（図-7）は、「建築物」が海岸線沿いに林立し、「人」は海道を移動しながら海道沿いの「建築物」のスリットを通して「海景」を眺められる。その状況は、海岸線に建築物が立地し、海景は海道から垣間見られる程度であるが、海道を移動する人に移り変わる景観として捉えさせることができる。他方は、広大であるために、ともすると視線が定まりにくい海景の中で、建築物自体がアイストップになることによって、空間が引き締められるものである。「11. 瀬戸弁財天」（図-8）でいえば、海が広がる自然景観を、出島上にある「建築物」が「海景」を引き締めている。このような広大な海や山並みといった自然地形が卓越する景

観は、ともすると茫漠かつ単調になりがちだが、ここでは島がアイストップになっているために空間が引き締められ、さらにその島上には人工物（建築物）が際立って存在するので、それがアイストップとしての効果（引き締め効果）を一層高めている。

(3) 視線誘導型

この型（図-5）において「人」（ X_6 ）と「建築物」（ Y_6 ）は、6つの類型の中で海岸線から最も離れた位置にあり、表-1のNo.12の「人の位置」と「建築物の立地場所」に示すように、「まち並みを見渡せる丘陵」となった。「海景」は、6つの類型の中で最も沖合にある「同時型」に次いで海岸線から離れた位置（ Z_6 ）に存在し、表-1に示すように「海景の位置」は、水平線よりも海岸線に寄った湾内の「沖」である。表-2には、ここでの「人」の状況は、「海に

図-6 2. 八景坂 鑑掛松

図-7 7. 佃島 住吉明神社

図-8 11. 瀬戸弁財天

図-9 12. 潮見坂

向かって伸びる街道上から海を眺める。」「建築物」は「海を望める丘陵の斜面に立地している」ことや「海へ向かって伸びる沿道の両側に軒を連ねる」といった状況を示しており、このことから建築物は視点場（人）の両側に建つものであると考えられる。

これよりこの型は、視点場と視対象（海）との大きな高低差や海方向へ伸びる沿道の建築物が、遠方に広がる海に向けて視線を誘導するものである。「12. 潮見坂」（図-9）でいえば、「海景」の主題となる海は、ふもとの街並みを越えた遠方にあるため、ややもすれば「海景」は望めないか、まちなかの事物に視線が向けられがちであるが、海に向かって下る坂に沿って「建築物」が建ち並ぶことで「海景」へと視線が誘導され、海岸線から極めて離れた内陸の視点場からでも、はるか遠方の海を見渡すことができる。

(4) 活動誘発型

図-5 では、「人」($X_1 \cdot X_2$) は6つの類型の中で最も海岸線寄りであり、表-1のNo. 13~25に示すように「人の位置」は、「海岸線沿い」や「海岸線から後退した建築物の内部」となった。「建築物」(Y_2) は「引き締め型」や「水面一体型」の次に海岸線に近い位置となるため、表-1の「建築物の立地場所」は「海岸線から後退した陸域」とした。「海景」は表-1の「海景の位置」に示すように「波打ち際」、「岸寄りの海上」、「沖」などさまざまで、海岸線からの距離としては近いものと遠いものであるため、「海景」の目盛が $Z_1 \sim Z_5$ となりZ軸に幅広く分布している。表-2に示すようにこの型は、「建築物」が「海岸線から後退して建つ」、「地面と近い高さの座敷をもつ」、「海側全面に縁側のある開口部をもつ」といった3つの状況が共通し、また「海景」は幅広い分布を持つ（図-5）が、これは「春先の砂浜で人々が潮干狩りをする」、「満潮時の入り江に海水が満たされる」など潮の干満によって視対象が遠・近さまざま変化することが共通していることから、この類型とした。

この類型では、建築物が屋内外を行き来しやすい立地や形態をしているため、潮の干満に伴い景物が遠近さまざま変化する海景に対して、離れる・近づくという活動を誘発させている。「17. 瀬戸橋（I）」（図-10）では、解説に「橋の下より潮さし入りぬれば、はるばる遠き山の奥まで湖水となり、潮引きぬれば水鳥も陸にまどうにこそ、水陸の景気も朝夕にかはり、金岡も筆およばざりしとなり。」と記述され、潮の干満とそこに息づく生物や地形との関わりが愛でられていることが読み取れる。「建築物」は、海側に大きな開口部や縁側を有し、その開口部を通してそうした「海景」に意識を向けさせ、縁側によって「より近づいて見る」という行為を誘発している。

このように、海景の景物となるものが潮の干満に伴って多様に変化することで人の興味を引き付け、建築物が地面と近い高さの座敷や、海側全面に開口部と縁側をもつことで、屋内外の行き来を容易にしているのがこの型の特徴である。

(5) 同時型

この型は、「人」(X_3)「建築物」(Y_3) は「引き締め型」や「水面一体型」、「活動誘発型」より海岸線から内陸に位置し、具体的には表-1のNo. 26の「人の位置」に示す、「海道の陸側にある建築物の内部」である。「海景」(Z_6) は6つの類型の中で最も沖合に位置し（図-5）、表-1にあるように「海景の位置」は「水平線」である。表-2に示すように、ここでの「建築物」の状況は、「海岸線から後

図-10 17. 瀬戸橋（I）

図-11 26. 高輪海邊 七月二十六夜待

退して立地し、「高い位置に座敷がある」建築物であり、「人」の状況は「海岸線から後退して建つ建築物の二階から海を眺めている」である。そして「海景」は「月の出を待つて海辺でにぎわう人々」の様子や「月が水平線から昇る」情景であると考えられる。

これらのことからこの型は、陸のにぎわいと海上のにぎわいが一体となって創出され、高い視点場からそのにぎわいが同時に視体験できることで、陸と海という異なる空間の一体感が享受できるところに特徴をもつ。「26. 高輪海邊七月二十六夜待」（図-11）でいえば、「建築物」が海岸線から後退することで海道（陸側）のにぎわいの空間が確保され、そのにぎわいは海上の船舶群のにぎわいと一体的に眺められる。そうした一体的なにぎわいを酒樓二階の高い視点場から眺めることで、陸と海を同時一体的に楽しむことができる。

(6) 水面一体型

これは、「人」($X_1 \cdot X_2$)「建築物」(Y_1)「海景」($Z_0 \cdot Z_1$) が6つの類型の中で最も海岸線の近くに寄り集まるものである（図-5）。表-1のNo. 27~31の「人の位置」に示すように、「人」は具体的に「海岸線沿いの建築物の内部」にあり、「建築物の立地場所」は「海岸線沿い」、「海景の位置」は「波打ち際」や「海岸線」にある。表-2に示すように、「海景」は「砂浜が浦波に美しく洗われる」や「海岸に夕浜がおこる」などの状況が注目されることから、いずれも海岸線一帯の雰囲気を一興させるものであるといえる。そして「建築物」は「海岸線に接している」、「水面と近い高さの座敷がある」ことで、「海景」近くに視点場となりえる空間を確保している。

これによりこの型は、接岸した建築物の内部から低い視点で水面との一体感が楽しめるものと、複数立地する建築物のスリットを通

して水面の状況が際立たされるものとの2種類の特徴がみられた。例えば前者に該当する図-12の「30. 瀬戸明神社(V)」では、海岸線に接した低層建築物があり、その屋内には水面との高低差が小さい座敷が設けられている。また、解説に「杜前の老樹、浦風に靡き、打ち寄る浪は下枝を洗ふ。」とあることから、眼前の松が波に洗われる様子(主題)が愛でられていたことがわかり、視点場からはそうした海岸線付近での水面が醸し出す雰囲気や屋内で享受できるものになっている。

後者の「31. 洲崎明神」(図-13)では、護岸の形態が雁木(階段状の護岸)であることで、潮の干満や打ち寄せる波の動きなどが感じられる場所となり、その様子を眺める視点場の両側にある「建築物」の額縁効果(フレーム)により雁木やその周辺の水面が際立ち、その水面と視点場との一体感が享受できる。

このように、低い座敷や開口部をもった建築物が海岸線沿いに建つことで、水面に極めて近い位置に視点場を定めることができたり、建築物によるフレームを通して、その周辺の水面の表情が楽しめるなど、水面との一体感が享受できるものがこの型である。

5. まとめ

本研究では、「人」と「建築物」と「海景」の空間的関係を捉えるために、それぞれを軸(X、Y、Z軸)として三次元的に表す手法を提示し、その結果、表-3に示すような特徴を有する6つの「海景観賞の型」に類型化できた。

このように、海景の観賞方法が本研究の対象である「江戸名所図会」だけをみても6通り得ることができたが、それらの「海景観賞の型」を成り立たせる「人」「建築物」「海景」の各特徴は、海岸および周辺の地形、海象状況、生物等を含めた自然事物などによるものであることが理解できる。今後は、表-3に示すような特徴を満たす「海景観賞の型」を活用することで、個性的で豊かな海岸風景や整備方法等の創出につながると認識する。

※補注：例えば中村良夫の「風景学入門」⁷⁾、斉藤潮の「領域の相互視体験に基づく港まちの景観計画に関する基礎的研究」⁸⁾、篠原修らの「伝統的橋詰のデザイン規範」⁹⁾などがあげられる。

表-3 「海景観賞の型」を成り立たせる「人」「建築物」「海景」の特徴

型名	型の概要	人(視点場)	建築物(形態・立地場所)	海景(視対象)
(1) 開放型	高台に立地する建築物内が視点場となり、その建築物の海側の壁面に大きな開口部があることで、眼前の自然物を介して眼下の海が一望できる。	・高台に立地する建築物の内部である。	・高台に立地する。 ・海側の壁面に大きな開口部をもった開放的な造りで、建築物内部から周辺の自然物とともに海景が広々と見渡せる。	・建築物周辺もしくは視点場と海景の間にある自然事物(植物等)によって視線が海景へと誘導される。
(2) 引き締め型	海道を視点場として、海岸線沿いに連立する建築物の間隙(スリット)により引き締められた海景が、シークエンスとして眺められる。 出島上の建築物がアイストップとなるため、広大かつ茫洋として視線が定まりにくい海景が引き締まって見える。	・建築物が連立する海岸線沿いの海道である。 ・海に突き出した土地に立地する建築物が見える海岸線沿いである。	・接岸して連立している。 ・連立する建築物間にはスリットが設けられ、海景を垣間見ることができる。 ・海側に突き出した土地に立地することで、広大な海のアイストップになっている。	・海道を視点場として、建築物のスリットからシークエンスとして海景が垣間見られる。 ・建築物のスリットを介するため、海景が引き締められる。 ・海岸線から海側に突き出した建築物がアイストップとなり茫漠としがちな海景が引き締められる。
(3) 視線誘導型	高台の視点場と視対象(海)の大きな高低差や海方向に下る坂道の沿道両側に立地する建築物などにより、内陸のまちなかにいながら遠方に広がる海へと視線が誘導される。	・高台(まちなか)の海方向に下る坂道である。	・高台に立地している。 ・海方向に下る坂道の両側に連立して、視点場から海方向へと視線を誘導する。	・海方向に下る坂道の地先に広がる。
(4) 活動誘発型	海岸線沿いに立地する建築物が、屋内外の往来を容易にする形態をとることで、潮の干満で変化する海景が屋内外の多様な視点場で楽しめる。	・容易に往来できる建築物内(座敷)・外(海岸線近傍の空地)である。 ・屋内外を往来して海景を眺める。	・海岸線沿いに立地する。 ・海側全面に開口部を造り、座敷と地面の高低差を小さくすることで、屋内外への移動を促している。	・満潮時には豊かな水量、干潮時には干潟に息づく生物など、潮の干満に伴い多様に変化する。
(5) 同時型	陸・海上それぞれのにぎわいを高い視点場から同時に一望できることで、陸と海という異なる空間の一体感が楽しめる。	・海岸線沿いの繁華街に立地する建築物内の高い座敷(2階など)である。	・海岸線から後退して立地することで、海岸線沿いににぎわいを創出している。 ・2階などの高い位置に座敷(視点場)がある。	・海岸線沿いの陸域のにぎわいと、海上の船舶等のにぎわいが同時に創出されている。
(6) 水面一体型	接岸した建築物内の低い視点場(座敷)から水面の表情を見て水面との一体感が楽しめる。 雁木や連立する建築物の額縁効果によって際立った水面の表情が楽しめる。	・海岸線沿いに立地する建築物内部である。 ・建築物が連立する海岸線沿いの海道である。	・静穏域に接岸して立地している。 ・水面との高低差が小さい座敷をもち、海側全面に開口部が設けられている。 ・静穏域に接岸して連立している。 ・スリットが設けられ、海景を垣間見ることができる。	・波に洗われる木の枝などにより、湾内(静穏域)での水面の動きが強調され、水面の雰囲気が高められている。 ・雁木や連立する建築物の額縁効果によって湾内(静穏域)での水面の動きが強調され、水面の雰囲気が高められている。

図-12 30. 瀬戸明神社(V)

図-13 31. 洲崎明神

引用・参考文献

- 1) 篠原修：水体験の意味論と景観設計、ポラード、Vol. 6、pp. 8~11、(財)港湾空間高度化センター、1990. 3
- 2) 上島顕司・善見政和：伝統的な水辺空間における眺望及びアクセスのデザイン原則に関する研究、土木計画学研究・論文集、No. 16、pp. 473~478、1999. 9
- 3) 須藤拓・樋口忠彦・玉川英則：近世以前の水墨画にみる水辺の景観構成について、日本都市計画学会学術研究論文集、第25号、pp. 667~672、1990. 10
- 4) 石川英輔他：原寸復刻江戸名所図会 上・中・下巻、評論社、1996. 12
- 5) 市古夏生・鈴木健一：新訂江戸名所図会 全8冊、筑摩書房、1996. 10~1997. 2
- 6) 文献4) 上巻 p. 6
- 7) 中村良夫：風景学入門、中央公論社、1982. 5
- 8) 斉藤潮：領域の相互視体験に基づく港まちの景観計画に関する基礎的研究、日本都市計画学会学術研究論文集、第21号、pp. 439~444、1986
- 9) 堀繁・篠原修・樋口伸一：伝統的橋詰のデザイン規範、土木史研究、第10号、pp. 93~102、1990. 6

(2001年1月10日原稿受理、2001年7月10日採用決定)